

# 石川県立美術館だより

平成16年7月1日発行 第249号

特別陳列

## 古九谷へのまなざし

- 昭和・平成の名工たち -

6月17日(木)~7月19日(月・祝)会期中無休



小松市指定文化財 九谷松鶴文九角大皿 初代徳田八十吉 小松市立錦窯展示館蔵

### 目次

古九谷へのまなざし、近代の美術 .....	2	企画展示室、各地の展覧会 .....	6
古九谷・再興九谷名品展(前期) 鑑賞ファイル ...	3	企画展TOPIC(香月泰男展 第1回) .....	7
常設展示室 主な展示作品、映像ギャラリー ...	4	美術館の本、7月の行事案内 .....	7
展覧会回顧(日本の四季) .....	5	所蔵品紹介、次回の展覧会 .....	8
ミュージアムレポート .....	5	ミュージアムショップ通信 .....	8

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

## 常設展示室 (第5展示室)

特別陳列

## 古九谷へのまなざし

6月17日(木)~7月19日(月・祝)

暮れる蓮池  
北出不二雄

この特別陳列は、石川県立美術館の所蔵品を主体として、古九谷への熱いまなざしを創作の原動力とした名工たちの作品から、昭和・平成期に制作されたもの五四点を選定し、独自の作風を打ち出して伝統と対峙していった軌跡をたどるとともに、古九谷の文化的求心力に対する理解を深めることを趣旨とするものです。

なお作家については、展示総数の制約や将来の企画も考慮して、今回は六五歳以上と物故者を一応の基準とし、初代徳田八十吉、富本憲吉から、二代浅蔵五十吉氏、北出不二雄氏、三代徳田八十吉氏、吉田美統氏ら三三名を選定しました。

十年ほど前、ある新聞に「古九谷はアンチ徳川の芸術」との見出しが付いた論考が掲載されました。古九谷の本質を語るのに、これは言い得て妙だと感心した記憶があります。加賀藩三代藩主前田利常が推進した文化政策にはこの「アンチ徳川」という性格が強く打ち出されており、それは息子で、古九谷の実際上の生産を行った大聖寺藩の二代にわたる藩主の利治、利明にも確かに継承されています。

古九谷の特徴として誰もが挙げる、強烈なエネルギーの源泉はこうした土壌から生まれてきたものと考えられます。そのエネルギーは古九谷の生産が終了した後、陶工たちを魅了し続け、今日に至っています。

今回の展示で特に注目していただきたいのは、昭和・平成期の名工たちが、その創作活動をおして古九谷の美的価値を再認識する機運を盛り上げたということです。しかし今回展示するのは、決して単に古九谷の作風を模倣したものばかりではありません。それぞれの作家たちは、古九谷のエネルギーに触発され、現代という時にふさわしい創作姿勢を打ち出しています。

今回は第2展示室で、「古九谷・再興九谷名品展」が同時に開催されます。あわせてご鑑賞いただくことにより本展の趣旨がよりご理解いただけると思います。

前田育徳会の所蔵品といえば、歴代藩主が収集したもので使用したものが多く、古美術としての印象が強いと思います。しかし明治に入ってから、ヨーロッパや日本の近代絵画、彫刻の名品も数多く収められました。そのいきさつは前号でもご紹介しましたが、軍人であるとともに、文化への造詣も深かった十六代当主利為侯(一八八五~一九四二)が大きく関わっています。

コレクションのうちの西洋絵画は、明治四十三年に明治天皇と皇后が本郷邸に行幸啓された際、新築された西洋館「懐徳館」(戦災で焼失)の室内装飾用に購入した作品が中心となっていますが、それらは黒田清輝と野口駿尾の仲介で、富山県高岡出身の画商林忠正がフランス滞在中に集めた三百余点の中から選ばれたものです。また今回展示されるアマン・ジャンの作品のように、利為侯自身が駐英大使館付武官として滞欧中に、画家との親交を通して購入されたものも含まれています。

西洋絵画の作家中、デュモン、ロツサーノ、ル・デュックは、伝統的な描法による風景画や風俗画を描きます。ロツサーノは反アカデミックな方向で絵画の革新を目指したレジーナ派の中心的存在として知られ、ル・デュックはパリ・ノートルダム大聖堂などをはじめ、フランス革命で損傷した建造物の修復を数多く手がけました。またブーダン、ギョーマン、アマン・ジャンは印象派に関係づけられる画家たちです。特にブーダンは、印象派を代表する画家モネの才能をいち早く認め、戸外で風景画を描くことを勧めたというエピソードを残しています。同時に紹介する日本画の彩色には、結城素明「澄潭」や鍋木清方「梅見茶屋」など、印象派の影響がうかがわれる作品も見られます。

今回は西洋絵画の名品を始め、日本画の秀作と彫刻作品二十点を紹介いたします。その多様な近代美術の諸相をご鑑賞下さい。

常設展示室 (前田育徳会展示室)

特集

## 近代の美術

6月17日(木)~7月19日(月・祝)

常設展示室 (第2展示室)

特集

# 古九谷・再興九谷名品展

前期：6月17日(木)~7月19日(月・祝)

後期：7月23日(金)~8月22日(日)



色絵牡丹文平鉢

石川県は、伝統工芸の盛んな地域として広く知られており、多くの産業が現在に伝えられています。なかでも「九谷焼」は、その代表的な美術工芸品として、今日も盛んに生産されています。

九谷焼という名称は、このやきものが初めて焼成された場所が、加賀国江沼郡九谷村（現在の石川県江沼郡山中町）であったことから、地名よりその名をとって名付けられたといわれています。

一口に九谷焼といっても、江戸時代前期の「古九谷」に始まり、江戸時代後期に入って古九谷復興を目的とした「再興九谷」、殖産興業・貿易品として発展した明治の九谷焼、そして小松・寺井・金沢など加賀の各地で生産される現代の九谷焼まで多様な展開をみせています。

今回の「古九谷・再興九谷名品展」では、古九谷の十七点と再興九谷の三十二点、あわせて四十九点を展示します。

日本の色絵磁器の王者とまでうたわれ、世界的にも広く知られている「古九谷」。再興九谷では、最初の窯である「春日山窯」や加賀藩営の「若杉窯」、古九谷に次いで声価の高い「吉田屋窯」、赤絵細描の八郎手といわれ、独特の趣を持つ「宮本屋窯」、京風の優美な金襴手の「永楽和全」、洋絵の具を加味して彩色金襴の新しい画風を始めた「九谷庄三」など、数多くの窯が生まれ、陶工が活躍しました。それら各時代と窯の移り変わりによって上絵付の作風が変わり、明治以降今日までの九谷上絵に強い影響を与えています。

こうした歴史の上に、現代の九谷があり、多くの作家が古九谷以来の伝統にのっとりながらも、独自の作風を生み出してきました。第5展示室で同時に開催される特別陳列「古九谷へのまなざし 昭和・平成の名工たち」とあわせてご覧いただくことで、九谷焼の流れをご覧いただく格好の機会かと思えます。

## 鑑賞ファイル No.1

今月号から始めました「鑑賞ファイル」は、より楽しく作品を鑑賞するための豆知識を紹介するコーナーです。



## 古九谷の配列



青手罌粟図平鉢



色絵鶴草花図平鉢



色絵百花散双鳥図平鉢



色絵石畳双鳳文平鉢

第2展示室に展示される古九谷の優品。平素であれば、12点。今回の特集では17点ですが、展示される順序は、年代を追っていることをご存じでしたか。

江戸時代初期、西暦1650年頃に始まり、1710年頃に廃窯となったとされる古九谷を、当館では48点所蔵しています。それらを分類すると、

器の全面にわたって絵を描き、呉須による線描も大きく強く、縁に唐草文様をめぐらすもの。

縁を数区に分け、幾何学文様や小紋様で埋め、見込みに山水、花鳥などを描いているもの。

器全面または縁の部分に菊花を中心とする写生的な小紋で埋め尽くし、その間に窓枠をとり、各種の紋様を描いたもの。

全面を幾何学文様などの割り文様で飾ったもの。の4つに分けることができます。

これが古九谷の編年をほぼ示していると考えられ、展示もおおよそその順序に従っています。

常設展示室

# 主な展示作品

6月17日(木)~7月19日(月・祝)

● = 国宝      = 重要文化財  
= 石川県指定文化財



空の肖像 森本仁平



婦人の首 畝村直久

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料	

観覧料

夏目 稲元 実

桜下人物図 紺谷光俊

中村 徹

## 第6展示室 (日本画)

釉裏金彩牡丹唐草文花瓶

耀彩小紋水指

釉彩華陽飾鉢

特別陳列 古九谷へのまなざし

昭和・平成の名工たち

第5展示室 (工芸)

波乗り

婦人の首

彫塑

連理

裸女達に捧ぐ

馬に凭る(B)

空の肖像

油彩画

特集 追悼 森本仁平展

第3・4展示室 (油彩画・素描・彫塑)

青手樹木図平鉢 古九谷

色絵鶴かるた文平鉢 古九谷

特集 古九谷・再興九谷名品展(前期)

第2展示室

色絵雌雄香炉

第1展示室

色絵雌雄香炉

雌雄矮鶏

梅見茶屋

洗濯婦図

特集 近代の美術

前田育徳会展示室

稲元 実

紺谷光俊

中村 徹

吉田美統

三代徳田八十吉

二代浅蔵五十吉

昭和・平成の名工たち

特別陳列 古九谷へのまなざし

釉彩華陽飾鉢

耀彩小紋水指

釉裏金彩牡丹唐草文花瓶

波乗り

婦人の首

彫塑

連理

裸女達に捧ぐ

馬に凭る(B)

空の肖像

油彩画

特集 追悼 森本仁平展

第3・4展示室 (油彩画・素描・彫塑)

青手樹木図平鉢 古九谷

色絵鶴かるた文平鉢 古九谷

特集 古九谷・再興九谷名品展(前期)

第2展示室

色絵雌雄香炉

第1展示室

色絵雌雄香炉

雌雄矮鶏

梅見茶屋

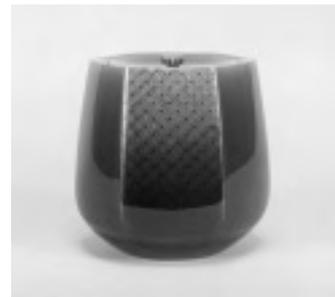
洗濯婦図

特集 近代の美術

前田育徳会展示室



桜下人物図 紺谷光俊



耀彩小紋水指 三代徳田八十吉

## 映像ギャラリー

今月の映画・ビデオ

7月4日(日) 月例映画会 / ホール	伝道者 ヴァン・ゴッホ	
	画家は何故画家になるのか	(23分)
	九谷焼	(22分)
7月11日(日) ビデオ鑑賞会 / ホール	国宝4 東大寺 法華堂と戒壇院	(29分)
7月18日(日) 月例映画会 / ホール	故郷喪失者 ヴァン・ゴッホ	
	画家は色とかたちに舞う	(23分)
	金沢漆器	(29分)
		いずれも入場無料

今月の映像ギャラリーは、上記のメニューを予定しています。

このうち、ビデオ鑑賞会では、先月に引き続いて東大寺に関するビデオを取り上げます。東大寺の法華堂は、

東大寺に残る最古の天平時代の建築物で、堂内には優れた仏像が安置されています。8世紀中頃に制作されたといわれる本尊の不空羂索観音像は、三眼八臂、乾漆造りの3メートルを超える巨像です。手に持つ羂索と呼ばれる縄は、投げられると大きな網になり衆生をもらさず救うとされています。また、頭上の宝冠には、2万7千におよぶ宝玉が散りばめられていて、天平時代の工芸技術の水準の高さを示しています。そうした堂々たる観音の姿には、国を守り人々を救う偉大な力が感じ取れるでしょう。そのほか、金剛力士像、四天王像、梵天・帝釈天像など、いずれも乾漆造りの天平彫刻の優品が紹介されています。一方、僧侶になるものに戒律を授ける場として建てられた戒壇院には、中央の多宝塔の四方に、塑像の四天王像が配されています。これらの像も8世紀中頃に制作されたと考えられ、前方の持国天、増長天は動、後方の広目天、多聞天は静の姿であらわされています。いずれも写実的で迫力に満ち、その均整のとれた高貴な表現は、天平彫刻の頂点を示す名品として知られ、神秘的な空間の中で強い存在感をもって見るものに迫ります。

# ミュージアム レポート

## ギャラリートーク

4月24日(土)「日本の四季」



本年度から新たに始められたものです。従来の列館解説に比べて、行う者としては少し意識したことがあります。展覧会でのギャラリートークは、展覧会の主旨説明、作品の解説、作者の紹介等ということになりますが、主旨の説明を十分に行うこと、講義室での講座と違い作品を前にしての話ですので、より詳細な作品の解説を行うことです。作品を前にしての皆様からの質問も楽しみました。

5月22日(土)「漆の美」



特集「漆の美」は、所蔵品・寄託品の漆工品の中でも蒔絵の作品を中心に展示構成しました。漆の作品という括りの中で、日本人の美意識がいかにも多様に表現されているかを認識するとともに、往時の人々が「もの」に対していかに想い入れを持って制作にあたり、また使用したかを感じていただくための一助となるように紹介しましたが、楽しんでいただけましたでしょうか。ほんの一時でしたが、ご参加の皆様には、作品が工芸品として生きていた時代にタイムスリップしていただいたように思いましたが…。

## キッズ 鑑賞講座

5月8日(土)「第1回 木の表情」



今年度より、キッズ プログラムと題して、小学生対象の鑑賞講座と体験講座を開講しております。今回、常設展示室を使用して、第1回目の鑑賞講座「木の表情」を行いました。

お父さんやお母さんと一緒にやってきた小学生たちは何をやるにもとても真剣。どんな話しが飛び出てくるのか、クイズや鑑賞活動に一生懸命な表情を見せてくれました。次回の鑑賞講座は7月10日(土)です。初回に参加できなかったお子さんも、2回目からでも大丈夫です。この機会に私たちとたくさんさんの美術に親しみましょう。

## ミュージアムコンサート

5月9日(日)「平井み帆 チェンバロ・リサイタル」



今回のミュージアムコンサートでちょうど90回目を迎えました。当館所蔵のチェンバロを使用して、春の企画展「日本の四季 春・夏の風物」にふさわしい作曲家クーブランの人間と自然の交流を

テーマにした小品を中心に選んでみました。

奏者による解説もわかりやすく、素晴らしいチェンバロの音色にすっかり魅了されました。大変好評な演奏会だったように思います。また、金沢市内の方からお礼のお葉書もいただき、ありがたく思っております。

# 展覧会回顧

## 日本の四季 春・夏の風物

本展では、桃山時代、江戸時代の絵画と工芸品の中から、春・夏の花木草花を主題とする作品と、春・夏の季節の情趣をよく表す事物を取り上げた作品、季節感を感じさせる人々のくらしを取り上げた作品111点を展示し、日本美術の特色の一つといえる自然に対する優しい情感をたたえる作品を鑑賞していただきました。

展示の順序は、基本的に、春・夏の花木草花を主題とする作品を前半に、春・夏の季節の情趣をよく表す事物を取り上げた作品、季節感を感じさせる人々のくらしを取り上げた作品を後半に展示しました。梅、桜、藤、柳、罌粟、紫陽花、百合、鉄線、朝顔、夕顔、牡丹、蒲公英、杜若、菖蒲、桐等の花木草花と、瓜、茄子、南瓜の野菜に続いて、洛中洛外図、祇園祭礼図、観桜遊楽図、四季耕作図、雨宿図、浅野川風景図と続き、最後に浮世絵と俳画を展示しました。前半は、それぞれの花木草花のもつ良さ、特徴をうまく捉えた作品群により、こうした自然美によってはぐくまれた日本人特有の微妙な感受性の世界、自然に対する優しい情感等々を堪能いただけたことと思います。

作品の取り上げる季節は、春、夏単独の作品もありますが、春秋、夏秋、秋冬の二季節、春夏秋冬の四季を取り上げたものも多くあります。例えば、吉野山図屏風は、春秋で今回展示したのは、桜の一隻でしたが、もう一隻は紅葉です。また、賀茂競馬鞍馬火祭図屏風は夏秋です。硯箱などでも表が春で、内側が秋という作品もあります。また、四季草花図屏風や浅野川四季風景之図、草花図短冊などは、四季を取り上げておりますが、今回は春・夏の部分のみを展示しました。洛中洛外図屏風、四季耕作図屏風も四季ですが、これらは分離しがたいので、すべて展示しました。

後半の風物を取り上げた作品群は、美術館だより246号のTOPICで紹介しましたように各作品の成立、展開も紹介したいねらいをもっていました。説明不足だったように思います。また、洛中洛外図、四季耕作図、風俗図などは、それぞれ単独での展覧会で紹介した方がより理解をいただけたように思いました。

- 春・夏の風物 - ということで、秋・冬はというご質問をいただきました。だより247号に少し書きましたが、視点を変えて実現できたらと思います。

(南 俊英 学芸第一課長)



企画展TOPIC

「没後30年 香月泰男展」第1回

香月とシベリア・シリーズ



香月と自作のおもちゃ

香月泰男といえばシベリア・シリーズ、シベリア・シリーズといえば香月泰男と、この二者はほとんど同義語と言えるかのように不即不離に語られます。おそらく、明治以降の洋画史において、画家が描き出した一連の作品の中で、これほど著名なシリーズはないと断言できましょう。でも、香月が亡くなって既に30年、香月とシベリア・シリーズをこの展覧会で初めて知るといふ幸運を9月に持つという

方も多いと思われまふ。そこで今回は、その概略を述べてみましょう。

香月は明治44年山口県生まれ。東京美術学校に学び、在学中から梅原龍三郎率いる国画会に出品し、卒業後は教職に就く傍ら制作に励み、国画奨励賞、さらには文展特選と順風の活動を展開し、将来を囑望されていました。しかし、昭和17年末に召集を受け、翌年満州ハイラルへ出征、そして終戦を奉天で迎えるのですが、ここでソ連軍に捕らわれ、22年5月に無事帰国するまで、シベリアの三カ所の収容所に収監され、強制労働を強いられます。極寒と辛苦の中で数多くの仲間が死んでいきます。その思いを戦後キャンパスに綴った作品群が、全57作のシベリア・シリーズなのです。

シベリア抑留というときに思い浮かぶもう一人の画家がいます。香月と同年生まれ、本県大聖寺出身の画家森本仁平氏です。氏の場合は、朝鮮で教員を勤めるさなか、現地召集を受けて出征、8月、ソ連軍に武装解除され、シベリアへ強制連行されるのですが、途中脱走、約1000キロの山岳地帯を踏破して家族と合流し、その後釜山港から日本へ帰還するという大変な経験をなさっていました。以前、森本氏に香月のシベリア・シリーズ、どう思

われますかと尋ねたことがあります。その森本氏も今年の春天寿を全うされました。6月17日から7月19日まで、第3展示室で 追悼 森本仁平展 を開催いたします。祈りの絵画とでもいうべき、その静謐な風景作品をご堪能いただければ幸いです。

さて、本題に戻りますと、香月がシベリア・シリーズを本格的に描き出したのは、昭和34年以降、つまり終戦後15年ほど経ってからのことでした。なぜ、帰国後直ぐではなかったのでしょうか。それは、シベリアでの記憶を絵画化するにあたり、画家の内部で純化し、再構成する時間が必要だったのです。そして、思いを表現するにたる様式の確立。「シベリアを描きながら、私はもう一度シベリアを体験している」。以後生涯に渡りシベリアを描き続けることになる、画家の言葉です。

(二木伸一郎 学芸専門員)



避難民 1960年 山口県立美術館蔵

「没後30年 香月泰男展」の会期は9月25日(土)~10月24日(日)です。

美術館の本

蒔絵・人間国宝 寺井直次の世界	2,000
彫刻家 吉田三郎展	2,000
鳥と語る 詩魂の画家 脇田和展	2,200
前田利為と尊經閣文庫	2,000
前田育徳会の名宝 百工比照	1,500
茶道美術名品展図録	2,500
大樋長左衛門の世界	2,200
日本の四季・春・夏の風物-	1,200
	税込定価(円)

ミュージアムショップで販売中!!

郵送ご希望の方は当館へ電話でお問い合わせ下さい。

☎076-231-7580

7月の行事案内 《入場無料(ギャラリートークを除く)・いずれも午後1時30分から行います》

月日	行事	内容	会場
7/3(土)	美術講座	久隅守景筆 「四季耕作図屏風」を歩く (村上尚子 学芸員)	講義室
7/4(日)	月例映画会	伝道者 ヴァン・ゴッホ 画家は何故画家になるのか(23分) 九谷焼(22分)	ホール
7/10(土)	キッズ鑑賞講座	鑑賞講座「古九谷へのまなざし」 (西ゆう子 学芸主任) 小学生対象の講座です。常設展示を鑑賞しながらの作品講座になります。	講義室
7/11(日)	ビデオ鑑賞会	国宝4 東大寺 法華堂と戒壇院(29分)	ホール
7/17(土)	美術講座	石川の工芸 (南 俊英 学芸第一課長)	講義室
7/18(日)	月例映画会	故郷喪失者 ヴァン・ゴッホ 画家は色とかたちに舞う(23分) 金沢漆器(29分)	ホール
7/24(土)	ギャラリートーク	古九谷・再興九谷 (末吉守人 学芸第一課担当課長) 展示室内で行われるため、常設展示の入場券が必要です。	常設展示室
7/27(火)	キッズ体験講座	親子で鑑賞会 「工芸に挑戦! 小学校1・2年生」	講義室
7/29(木)	キッズ体験講座	親子で鑑賞会 「絵画(日本画)に挑戦! 小学校3・4年生」	講義室
7/31(土)	キッズ体験講座	親子で鑑賞会 「学芸員に挑戦! 小学校5・6年生」	講義室

7月の全館休館日は20日(火)~22日(木)です。

## 企画展示室

## 第6回石川示現会展

7月2日(金)~7月5日(月)第7展示室)

日展傘下の洋画団体である(社)示現会は昭和22年10月に(故)大内田茂士(故)酒原健三の両芸術院会員を中心に31名の創立会員によって結成され今年4月には第57回展を東京都美術館において開催いたしました。今般の「石川示現会展」は示現会本展に出品を続けている私達石川県内在住の画家が広く県内外の美術愛好の皆様に鑑賞いただきご批評を賜り私達ひとり一人が努力と研鑽を重ねより良い絵が描けるように、又そのことにより地域文化の発展に寄与できることを念じて発表いたします。示現会の作品は写実を中心とした具象絵画で過去の発表展でも大変好評を得ております。現在示現会石川県出品者協会に所属している作家は20数名を数え毎年新入選者を出し増加しています。将来石川県支部の結成も可能となり示現会本展の巡回も見込まれています。今般初めての石川県立美術館での発表ですが本年度示現会展出品作品を中心に一人2~3点の作品発表となります。ご高覧の上ご指導ご批評いただければ幸いです。

入場無料

連絡先 野々市町太平寺2-47

示現会石川県出品者協会 代表 神田直次

☎076-248-8186

## 石川の書展

7月2日(金)~7月5日(月)第8・9展示室)

石川県内の代表的な書作家の新作約200点を展示します。石川県書美術振興会は会派・社中を超えた書作家の団体であり、日本の代表的な書作家の作品を展示する「日本の書展」と、県内作家の新作を展示する「石川の書展」を1年おきに開催しております。本展は県内書壇の現状を知る上で格好の展覧会です。

入場料 一般 500円 高大生 300円

小中生 100円

当館友の会会員は、会員証提示により50円引き

連絡先 金沢市香林坊2-5-1

北國新聞社事業局

石川県書美術振興会事務局

☎076-260-3581

## 第18回日本新工芸石川会展

7月8日(木)~7月12日(月)第7展示室)

日本新工芸家連盟は、工芸の原点を見つめ、個々の作家が素材を生かし技術を駆使して、現代に望まれている生活と美との調和をテーマとして制作活動を行っています。石川会展も18回を迎えることが出来ました。会員一同、一層の努力を重ねております。より多くの方々にご高覧、ご批判をいただきたいと願っております。

主な出品作家

北出不二雄・高光一生・利岡光仙・榎木莊平・

原田実・戸出克彦・畑宏・高聡文・柴田博・

大井幸子・向瀬孝之・川田稔・松本昭二・高光一雅・

比古田三恵・金田一司・瀧川千春・瀧川佐智子・

堂畑勝二・伊豆蔵幸治・伊藤寿江・山道千草

入場料 一般500円 大学生以下無料

当館友の会会員は、会員証提示により300円

連絡先 金沢市宮野町ト74 戸出 克彦

☎076-257-5951

## 第8回石川県日本画協会展

7月8日(木)~7月12日(月)第8・9展示室)

県内在住の日本画の作家を中心とした会員の、県内未発表作品による展覧会です。各種公募展の枠組みや既存の概念にとらわれない自由な作品発表を目指し、会員それぞれが取り組んでいる日本画制作の研究・模索の発表の場、また研鑽の場ともなっています。ベテランから若手まで幅広い層にわたり、広く県内日本画家の作品および近年の活動を知る上で、絶好の機会となっています。

入場無料

連絡先 金沢市光が丘3丁目226番地2 竹内仁志

☎076-298-0104

## 第57回二紀展金沢展

7月15日(木)~7月19日(月)祝(第7~9展示室)

二紀会は、「類型化を排する。具象・非具象を論じない。創造的な個性の発現を尊重する。情実を排し新人を抜擢し、積極的に世に送る。」の主張を掲げて昭和22年以来活動を続けています。金沢展は、東京・本展出品作品約1,000点の中から厳選された、大家から新鋭まで絵画・彫刻あわせて73点を基本に、地元出品作家の作品51点を加えた計124点を展示します。

入場料 一般700円 高大生400円

中学生以下無料(団体料金は各100円引)

当館友の会会員は、会員証提示により300円

連絡先 金沢市花里町15-12 末政哲夫

☎076-263-6075

## 各地の展覧会.....7月

開催日程、休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

国吉康雄展 7/19まで  
富山県立近代美術館(富山市・076-421-7111)ランス美術館展 7/19まで  
奈良県立美術館(奈良市・0742-23-1700)ジョルジュ・ルオー展~出光コレクション 7/19まで  
島根県立美術館(松江市・0852-55-4700)ポール・デルヴォー その生涯と人物像 展 7/25まで  
新潟市美術館(新潟市・025-223-1622)新収品展 8/1まで  
京都国立博物館(京都市・075-541-1151)池田コレクション選抜展 7/3~8/15  
石川県七尾美術館(七尾市・0767-53-1500)日本芸術院所蔵作品展 7/9~8/29  
石川県輪島漆芸美術館(輪島市・0768-22-9789)

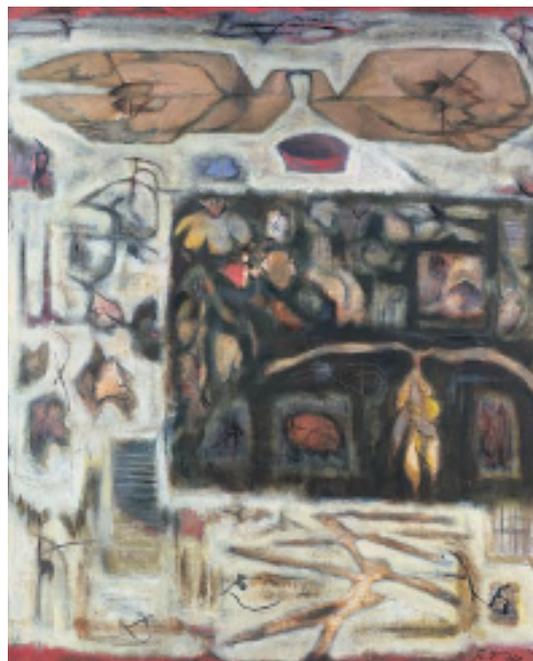
唐の詩人・白居易は、代表作『長恨歌』において、「天に在らば願わくば比翼の鳥となり 地に在らば願わくば連理の枝とならんことを」と詠い、玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋の顛末を連綿と語る長大な詩をまとめ上げました。訳すれば、天に召されたなら羽の繋がった2羽の鳥となり、再び地上に生まれたなら枝と枝がくっついた2本の木となりたいといったところでしょうか。つまり、比翼・連理とは、夫婦の情愛のきわめて深いことをいうのです。

脇田和は画中に向かい合い睦み合うつがいの鳥（比翼の鳥）をしばしば描き、愛に満ちた世界を展開してきました。本作でも画面上方の2羽の鳥にまず目が行くことと思います。そして次に目にするものはその下の黒い四角形ではないでしょうか。中は別の空間で、種々の連理草や連理の枝が描き込まれているのです。こうした画面の二重構造は作者特有のもので、その大胆な白と黒の対比は昼と夜を表し、いずれにも愛の寓意が描かれているとみなしてもいいでしょう。

しかし、こうした情緒たっぷりの世界は、寒色系を主体にした色調と幾何学的な形態とによって、うまくバランスが取られているのです。情と智とが融合し、凜とした品格を感じさせる作品です。

作者は金沢出身の実業家脇田勇の次男として、東京に生まれ、大正14年にベルリンに留学し、8年間絵画や版画技法など美術全般にわたって研鑽を積みました。帰国後は直ぐに頭角を現し、昭和11年、猪熊弦一郎、小磯良平らと新制作派協会を創立し、以後常に第一線にあって画壇をリードしてきました。現代画壇における最高峰の一人です。

第4展示室で展示中



れんり  
連理

わきた かず  
脇田 和 明治41年(1908)～

第58回新制作展  
縦162.0 横130.3(cm)

ミュージアムショップ通信

先頃開催された「第35回日展金沢展」ご覧になりましたか？「日展金沢展」が開催されるのは2年に一度ということもあり、一般の方から、学校の団体まで幅広い層の方々に鑑賞していただきました。わが国の文化・芸術の水準の高さを目の当たりに出来る素晴らしい展覧会でしたね。

さて、今回紹介するのは渦巻コップです。渦巻きの形の持ち手が付いたおしゃれなガラス器です。いよいよ夏本番がやってきます。見た目も涼しげな可愛いコップでじっと暑い夏をしのげるかもしれませんよ。同シリーズで他にミルクピッチャー（定価2,000円）も販売しています。



「渦巻コップ」(定価2,000円)

次回の展覧会

- 特集 前田家の婚礼調度 (前田育徳会展示室)
  - 特集 古九谷・再興九谷名品展(後期) (第2展示室)
  - 特集 夏休み 親子で楽しむ美術館 ~すてきな色を見つけよう~ (第6展示室)
- 7月23日(金)～8月22日(日)

休館日：7月20日(火)～22日(木)

石川県立美術館だより 第249号

2004年7月1日発行

〒920-0963 金沢市出羽町2番1号

TEL 076(231)7580 FAX 076(224)9550

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>